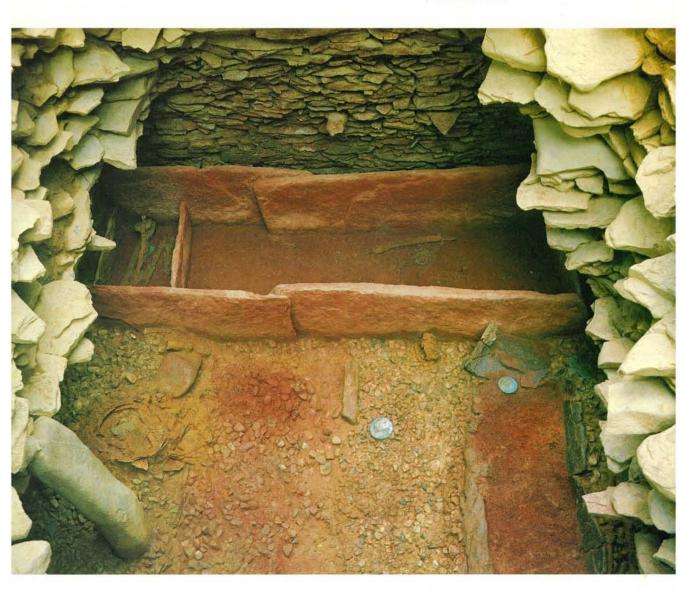
福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集

動崎古墳

No. * 化財センリ

1981~83年調査概報



1984 福岡市教育委員会

玄界灘に面する福岡市周辺地域は、古来より大陸・半島との交渉の門戸として、数多くの遺跡や遺物にそうした交流の跡をみいだすことができます。本書に収めた鋤崎古墳も、 $4\sim5$ 世紀における朝鮮半島と北部九州の交渉史をたどるうえで重要な位置をしめる一例です。

鋤崎古墳は、西区今宿青木にある全長62mあまりの前方後円墳です。墳丘の遺存がよく 家形埴輪などが採集されたこともあって、研究者のあいだで注目されていましたが、これ まで調査のメスが加えられていませんでした。

福岡市教育委員会は、重要遺跡確認調査の一環として本古墳をとりあげ、1981年度から3ヶ年にわたって調査を行いました。その結果、墳丘の形態や構造に関する知見とともにわが国で最古期の横穴式石室を検出することができました。今年度は調査の最終年度ですが、出土遺物の整理作業が終了していないこともあり、速報の意を含めて本概報を刊行します。

本書が、古代文化研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財について一層のご 理解とご協力を願うものであります。

なお、調査にあたり貴重なご助言を与えられた諸先生、ご協力・ご援助をいただいた関係各位、ならびに格別のご配慮を賜わりました土地所有者のかたがたに心から感謝いたします。

昭和59年3月1日

福岡市教育委員会 教育長 西 津 茂 美

目 次

Ι	はじめに1
I	古墳の位置と周辺の前方後円墳2
\coprod	墳丘4
IV	埴輪と土師器8
V	埋葬施設······1(
VI	おわりに

例 言

- 1. 本書は、福岡市教育委員会が主体となり1981年度から83年度に調査を実施した鋤崎古墳の記録概報である。
- 2. 本書の執筆は、V-2~5号埋葬施設を杉山富雄が、他は柳沢一男が行った。
- 3. 出土遺物の復原・実測には川村浩司、牟田慎郎、宮井善朗氏(九州大学考古学研究室)の協力をえた。
- 4. 遺構・遺物写真の撮影は主に柳沢が行ったが、横穴式石室の一部は九州歴史資料館石丸洋氏に撮影をお願いした。
- 5. 本書に使用する方位は磁針である。
- 6. 本書の編集は柳沢が行った。

Iはじめに

調査にいたる経過

鋤崎古墳は、福岡市西区今宿青木字鋤崎424-5・6に所在する全長62mあまりの前方後円墳である。丘陵端に後円部を配し、前方部端面を丘尾切断によってつくりだす。クビレ部が細くしまり前方部先端があまり開かない墳形や、細くて突出度の高い凸帯をもつ円筒埴輪が採集されることなどから、古式の前方後円墳として注目されてきた。しかし、これまで墳丘測量はおろか、何らのデーターも作成されておらず、古墳の詳細はほとんど知られていなかった。

さて福岡市教育委員会は、市域内に存する埋蔵文化財のなかで将来にわたって保存の要があるとみとめられる遺跡について、基礎資料の収集・作成をすすめている。鋤崎古墳もその一つとして以前から計画を重ねてきたが、ようやく1981年度から3年間にわたって調査を行うことができた。実施にあたっては、重要遺跡確認調査として国庫の補助を受けた。

調査の結果は、本書に収めた概要によってその一端をしめしえたが、墳丘ならびに埋葬施設の構造に多くの新知見を加えた。とくに後円部中央に営まれた横穴式石室は、調査時すでに天井部が陥没していたとはいえ、わが列島における横穴式石室導入期の姿相を理解するうえで貴重な事例といえるであろう。

調査組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化課長 甲能 貞行(前任)

生田 征生

埋蔵文化財第2係長 柳田 純孝(前任)

折尾 学

調査庶務 埋蔵文化財第1係 古藤 国雄・岡嶋 洋

調査担当 埋蔵文化財第2係 柳沢 一男・杉山 富雄

調査補助 田崎博之、牟田慎郎、宮井善朗、古野徳久、土井基司(

九州大学考古学研究室)、野村俊之(別府大学生)、赤司善

彦 (明治大学生)、南秀雄 (京都大学大学院生)

なお調査にあたって、福岡県教育委員会、九州歴史資料館から多々ご配慮を受けた。また調査中には、森貞次郎、小林行雄、岡崎敬、横山浩一、小田富士雄、西谷正の諸先生から貴重な指導・助言を受け、九州大学考古学研究室の全面的な協力をたまわった。さらに葺石の写真測量には、奈良国立文化財研究所、埋蔵文化財センターの協力をえた。鋤崎古墳所在地の地権者是松興産株式会社(是松上次代表)、仁田隆三氏は調査の実施に心よく許可いただいた。記して謝意を表したい。

年次別調査項目

1年度(1981) 墳丘、周辺地形測量(業者委託)

2年度(1982) 墳丘測量、後円部トレンチ (N、E1、W1)、東クビレ部 (E2区) の 発掘調査。

3 年度 (1983) 西クビレ部 (W 2 区)、前方部トレンチ (E 3 、E 4 、W 3 、W 4 、 S 、 B 、C T)、1 ~ 5 号埋葬施設の発掘調査ならびに埋め戻し。

古墳の位置と周辺の前方後円墳

鋤崎古墳の所在する西区今宿は、福岡県北西端の玄界灘に面する糸島平野東縁部にあた 古墳の位置 る。この一帯は、博多湾に沿って東西にのびる砂丘と背後にせまる高祖山(416m)とのあ いだに、東西3km、南北1kmあまりの低平な小平野をなす。鋤崎古墳は、隣接の早良平野 とを画する長垂~叶岳山塊(341m)の西麓、今宿平野でいえばその東端丘陵上に築造され ている。丘陵上からは平野部のほぼ全域を眺望することができる。ちなみに古墳の位置は、 1/5万地形図「福岡」の上端から21.7cm、左端から 6.8cmの地点である。

糸島地方の 前方後円墳

糸島地方には現在41基の前方後円墳が知られている。令制でいえば筑前国怡土・志摩の 二郡に属するが、筑前国域での前方後円墳が約 130基であり、その3割強をしめる。一地 域としては濃密な集中度である。分布状況は、河川流域を単位とする小平野周辺にまとま りがみられる。おおまかにくくれば、I長野川流域を中心とした西郡(11基)、2 雷山川、 端梅寺川域の中央群(14基)∭ 今宿平野部の東群(12基)、№ 志摩半島の北群(4 基)の四 群にわかたれる。古墳規模は総じて小形である。全長80mをうわまわる古墳は、一貴山銚 子塚(西群)、端山・築山(中央群)、丸隈山(東群)、開(北群)の5基をかぞえるにすぎな

各群とも前期から古墳の造営がみとめられるが、もっとも遡るのは北群の御道具山古墳 であろう。全長60mあまり、クビレ部が細く前方部が撥形に開く。西群では糸島地方最大 (全長103m)で、8面の仿製三角縁神獣鏡を副葬した一貴山銚子塚、中央群では出土した 土師器から端山古墳が最古である。東群の場合、三角縁二神二猷鏡、環頭大刀などを出土 した若八幡宮古墳があげられるが、北に接する山ノ鼻1号墳が先出の可能性がある。

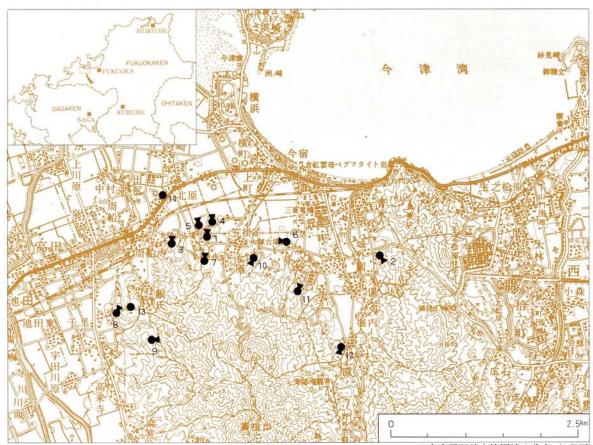
さて、鋤崎古墳を含む東群(今宿古墳群)は、12基の前方後円墳と30mクラスの大形円 今宿古墳群 墳3基が、高祖山麓丘陵上あるいは下部段丘面上に東西に列するように分布する。また丘 陵部には約 320基の小円墳からなる群集墳が密集する地域でもある。群集墳のなかには、

竪穴系横口式石室を埋葬施設とし、5世紀後半代に遡る一群もみとめられる。 前方後円墳12基の規模をみると二種に大別される。一つは50m前後以上、いま一つは30

系譜

m前後の小形墳である。後者は4基ある。いずれも群集墳の営まれた丘陵上にあり、群の 盟主的な位置をしめる。すべて横穴式石室墳であり、6世紀中葉以降の造営と考えられ る。これにたいして、前者に属する8基の前方後円墳は、平野部に突出した丘陵上もしく 首長幕の は段丘面上に位置する。また各古墳が、ほぼ四半世紀前後の差異をもって造営されており、 これらが今宿平野を本貫とした首長層の累代造営にかかる首長墓群ととらえることができ る。こうしたなかで鋤崎古墳は、5世紀前半の丸隈山古墳に先行する。石室構造・副葬品 ともに、その事実を例証している。また4世紀後半に位置ずけられる若八幡宮古墳に後出 することも明かであり、この二基のあいだに造営された首長墓と推測される。

老司・鋤崎古墳をはじめとする初期横穴式石室が、玄界灘に面した福岡・糸島平野にま ず成立した事実は、この地域が朝鮮半島と一衣帯水という位置にあるとしてもなお,地理 的要因のみで新しい墓制の導入を理解することは困難である。新たな墓制を受け入れる素 地と、前代からの彼地との通交、さらに4世紀後半代における百済と北部九州首長層をめ ぐる政治状況のなかで横穴式石室の導入が可能になったと想定される。糸島・福岡平野の 特異性については今後さらに検討すべき課題といえよう。



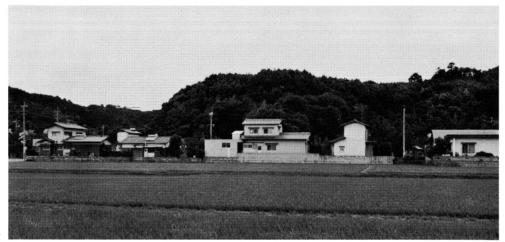
■ △ ☆	亚畔主要士	- 444 Bits	

▲今宿平野前方後円墳の分布 (1/5万)

lo.	古 墳 名	所	在	地	立地	全長(m)	葺石	埴輪	埋葬施設	出土遺物・その他	文献
1	若八幡宮	福岡市	西区	徳永	丘陵端	(48)	0		木棺直葬	三角縁神獣鏡、碧玉製管玉、ガラス小玉 環頭大刀、鏃、剣、鑪、刀子、竪矧板革綴 短甲、銅製有孔円板、土師器	1
2	鋤 崎	,,	"	今宿青木	丘陵端	62	0	0	横穴式石室	鏡6(舶載2、仿製4)、銅釧2、勾王、管玉、 ガラス玉、滑石製臼玉、櫛、素環頭大刀、 直刀、剣、鉄斧、鎌、蕨手刀子、鉇	2
3	丸隈山	"	"	周船寺	丘陵端	(79.5)	0	0	横穴式石室	仿製鏡2、巴形銅器、硬玉製勾玉、碧玉製 管玉、ガラス小玉、鉄剣、直刀、鉄鏃	3
4	山の鼻1号	"	"	徳永	丘陵上	(48)	0		?	墳丘半壊	
5	山の鼻2号	"	"	徳永	段丘上	(60)	0		?	墳丘破壞	
6	今宿大塚	"	"	今宿	段丘上:	64	0	0	横穴式石室?	埴輪、須恵器、陶質土器	4
7	下 谷	"	"	徳永	丘陵上	?			横穴式石室?	墳丘破壊	
8	飯氏二塚(子捨塚)	"	"	飯氏	段丘上	53			横穴式石室?	須恵器、埋葬施設破壊	
9	飯氏B14号	"	"	飯氏	丘陵上	24			横穴式石室		
10	小松原	"	"	女原	丘陵上	24			横穴式石室?	墳丘半壊	
11	谷 上	"	"	今宿	丘陵上	28			横穴式石室		
12	本 村	"	"	青木	丘陵上				横穴式石室	墳丘破壞	
13	飯氏 (兜塚)	"	"	飯氏	段丘上	31	0	0	横穴式石室	(鏡(径5寸)、鎧の金具)	
14	山崎	"	"	周船寺	段丘上	30			?		

文献 1. 柳田康雄ほか「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2 福岡県教育委員会1971

- 1. 柳田塚雄はか 石八曜日日県。 7日 2. 本書 3. 三島格・小田富士雄ほか『丸隈山古墳』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第10集) 福岡市教育委員会1970 4. 柳沢一男「今宿大塚古墳」『福岡平野の歴史 緊急発掘された遺跡と遺物』 福岡市立歴史資料館1977



墳丘全景 (西から)

\mathbf{III} 墳 fr.

古墳は叶岳から北西にのびる丘陵尾根上に築造され、後円部を尾根端に、前方部を尾根 上方に配置する。したがって、尾根上方にあたる前方部前端面は、尾根を横断する切通し 状の地山掘削によって整形している。

墳丘全体の遺存状況は、前方部隅角線での流出が目立つ程度できわめて良好な部類に入 遺存状況 る。しかし墳丘斜面の傾斜がつよく封土の流出、再堆積等のため、調査前に段築の有無は 確認しえなかった。また墳丘裾線も、クビレ部と前方部前端線を除いて、その境が不明瞭 となっている。測量時での観察では、墳丘は尾根の傾斜に沿って後円部側にしだいに下降 する可能性が想定されたが、具体的な確認をうるにいたらなかった。その段階では後円部 端の裾を25m前後の等高線付近と推測し、墳丘全長を約58m、後円部径35mあまりと想定 するにとどまった。

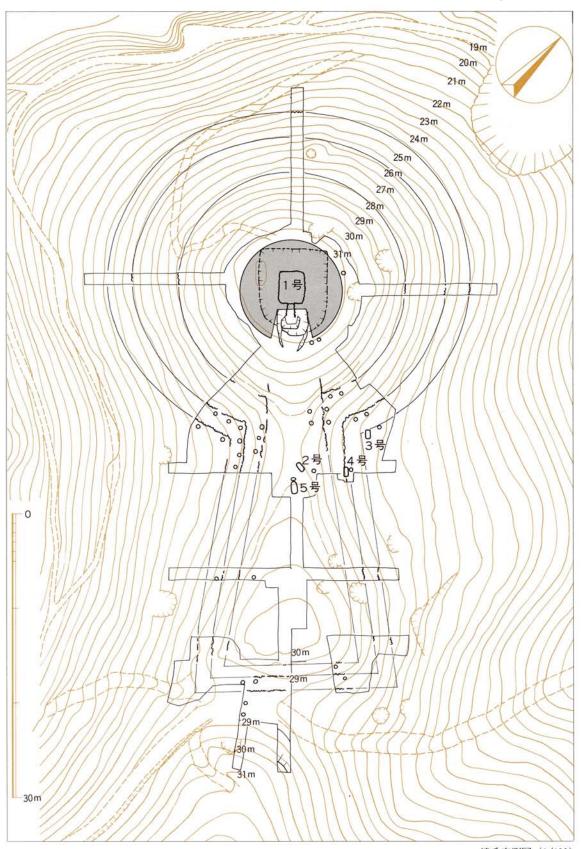
墳丘構造

墳丘規模、構造確認のトレンチは、各必要個所に設定した。クビレ部と前方部端につい ては、墳丘復原のため広範囲の調査区とした。各トレンチの詳細は本報告に譲り、ここで は墳丘構造についての概要を記すことにしたい。

墳丘の段築は後円・前方部ともに3段である。各段の斜面は、花崗岩小転石からなる葺 石をめぐらせる。基部には大形石材を配するが総じて小形である。作業区画をしめすよう な石の配列はみとめられない。斜面葺石、段テラスの遺存状況は、クビレ部に近いほど良 好だが、後円部の急斜面部、前方部隅角では流出したところもある。墳丘封土は、後円部 墳頂の60cmあまりの盛土を除いて、すべて地山(花崗岩風化土壌――マサ)削り出しによ って形成されている。前方部前端部では、幅11m、深さ 2.5mに尾根を切断している。墳 丘の地山整形は、各段の斜面、テラスまでにおよぶ。斜面葺石は地山とのあいだに20~30 cmの裏込め(土砂)を行いながら積みあげる。

墳丘側面観

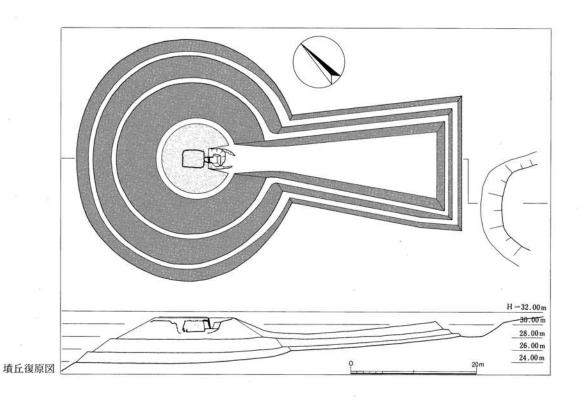
調査前に推定されたように、墳丘裾レヴェルは前方部から後円部に向ってゆるく下降し ている。もっとも高い前方部前端中央で標高28.2m、クビレ部(西側)25.9m、後円部端 の最低位部で23.8mをはかり、比高差は4.4mに達する。その傾斜角度は一定しておらず、 後円・前方部とも中央が低くなった弧状をなす。Ⅱ・Ⅲ段のばあい、葺石基石の下部レヴ ェルはⅠ段と同じく後円部に向って下降するが、後円部では水平に近いレヴェルを保つ。



墳丘実測図 (1/400)



後円部全景 (前方部から)







したがって、裾から頂部までの比高差の少い前方部と大きな後円部では同一の段でも高さ 傾斜角が一定していない。その側面観は左図にしめすように、アンバランスな様相をみせ る。墳丘規模は下表にしめすとおりである(単位m)。 ※ () 内は推定

(左)西クビレ部(西から) (右西クビレ部(南から)

		•			_		
長	前	17.	j e	ßÀ	ή	端	軸

	全 長	後 円 部 径	クビレ部幅	前方部長	前方部前端幅
I 段	62	38 - 36	15	27	(22)
Ⅱ段	(57)	33 - 31	10	27	(18)
Ⅲ段	(52.5)	24	6	28.5	(14)

なお、墳丘の特異な構造について2、3つけくわえておきたい。

まず、クビレ部におけるⅢ段の接続手法があげられる。すなわち、前方部墳頂面が後円 部Ⅲ段斜面の下位に連接するのは通例であるが、そのクビレ部折角が前方部墳頂面よりも 突出部 さらに上方にのびることにある。後円部Ⅲ段の葺石上部は崩落しているため全体を確認し えなかったが、折角は後円部墳頂に達していた可能性がつよい。つまり前方部墳頂面の接 続したⅢ段斜面上位は、周囲よりも一段高い「突出部」をなす。この部分に葺石はみとめ られず、いわば陸橋状の形状となる。こうした構造は、大阪府弁天山C1号墳、福岡県若 八幡宮古墳などの調査例があるが、いずれも「突出部」には葺石がめぐる。

墳丘規模

つぎに、後円部墳頂の構造がある。墳頂部は径12mほどの平坦面である。周囲に円筒埴 輪列がめぐり、その内側に拳〜人頭大の花崗岩を敷きつめた石敷面を構成する。中央部は 長さ 3.5m、幅 2.5m、深さ 0.4mほどの既掘坑かと思われる凹み (後に横穴式石室天井 崩落による陥没坑と判明) があり、その南端に墳丘中軸に直交する玄武岩板石頂部が露出 後円部墳頂 する(この板石は横穴式石室の閉塞石)。 立石から前方部に向って逆台形に敷石未設置部 分がひろがり、前述の「突出部」に接続する。後述するように、敷石未設部分は下部に営 まれた横穴式石室の墓道にあたる。墳頂面~前方部にいたる構造は、前代からの築造手法 によりつつも新たな墓制に対応すべき形態を模索した結果ではないかと思われる。

いま一つは、後円部平面図形の構成である。墳頂面、Ⅲ段基部はほぼ正円形を描くのに たいして、I・Ⅱ段基部の平面形は墳丘中軸線が短く、直交方向に長い楕円形をなす。そ 後円部の の差異は、I・Ⅱ段とも2mあまりである。たしかに、I段基部(裾)のレヴェルは、ク ビレ部と端部で2mほどの比高差がある。仮りに、その傾斜面に沿って正円形を描き、そ れを水平位に置換してもなお、平面の楕円形を解消するにはいたらない。墳丘平面図形構 成企画の問題を含めて、今後の課題としたい。

平面形

Ⅳ 埴輪と土師器

埴輪

墳丘を囲繞する円筒埴輪列は、墳丘裾・I段テラス・Ⅱ段テラス・墳頂面の4段に検出された。後円部墳頂面では敷石周囲にめぐるが、前方部に面する逆台形状の敷石未設置部には樹立されていない。円筒列の配列は遺存状況の良いクビレ部でみると、おおむね 1.5 mに1 本と比較的粗い。したがって埴輪の樹立は、一本単位の円形掘り方を穿ち、そのなかに凸帯第1段が地表に出る程度に埋めこむ手法である。円筒列のなかには朝顔形埴輪の樹立も破片の散乱から想定されるが、詳しい配列状況はわからない。円筒・朝顔形埴輪には鰭付のものもある。Ⅲ・Ⅲ段テラスのクビレ部に各1本づつの鰭付基部が検出されたが、そのいずれとも断定しえない。なお、前方部前端面裾をめぐる円筒列の配列は注意される。すなわち、西半部のみの検出であるため全体の構成を知ることはできないが、墳丘中軸線から約 4.8 m のところで直角に外折し、その内側には円筒埴輪の樹立がみとめられない。この空間からは、後述する土師器群が出土し、ある種の葬送祭式の場として設定されたことをうかがわせる。形象埴輪は後円部墳頂から家・盾形、前方部墳頂から盾・靱形が検出された。しかし前方部墳頂の中軸線上に検出された靱基部と思われる楕円形埴輪を除いて配置を知りうるものはない。

形象埴輪

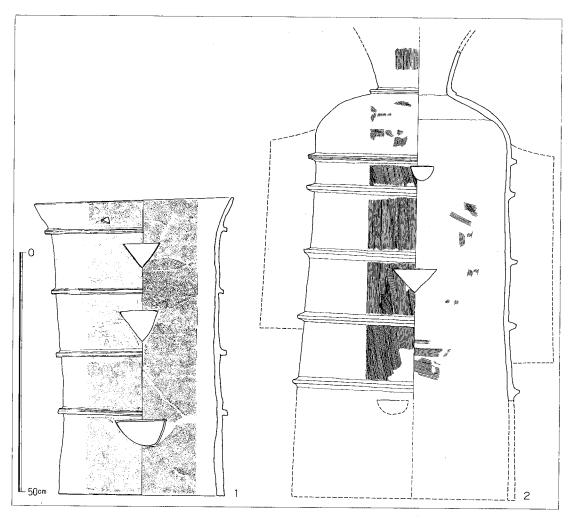
埴輪の配列

復原された 埴輪 出土埴輪の詳細は未整理のため本報告で記述するが、復原しえた2個体について概述しておきたい。右図の円筒埴輪は3号埋葬施設に転用されたものである。底径34.8cm、口径41.8cm、器高62.8cm、凸帯は4段である。透孔は1段(基部)に逆半円、3・4段に逆三角形を対向する2個を配する。5段(口縁部)に穿れた小三角形透しの配置は明かでない。調整は外面がタテハケ1次調整のみ、内面はタテ・ナナメハケ一部スリケシである。鰭付朝顔形埴輪は2号埋葬施設に転用されたもの。凸帯1段以下、口縁部、鰭を打ち欠いている。透孔は1・5段が逆半円形、3段が逆三角形、対向する2個が穿たれる。最上段凸帯間の幅が他に比して著く狭い。器高調整は外面タテハケ2次調整、内面はハケメを丁寧にスリケシている。なお出土したほとんどの埴輪外表に赤色顔料の塗布がみとめられる。すべて有黒斑の野焼き焼成である。

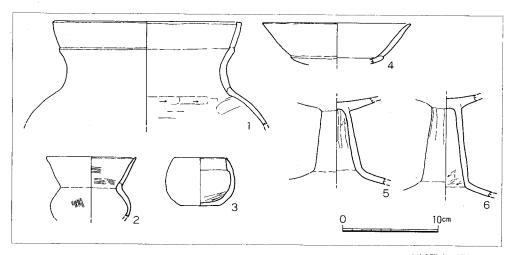
土師器

土師器は、上述した前方部裾のほか後円部墳頂、クビレ部から出土した。後円部墳頂一高杯1、クビレ部一高杯1、椀1、小型甕1、前方部裾一二重口縁壺1、中型壺1、小型丸底壺4、高杯8、脚付椀1、椀1である。いずれも細片であり復原が困難であるが、前方部裾出土の数点を図示しておきたい。

二重口縁壺(1)は球形の体部からゆるくカーブする頸部に接続し、弱い稜をなして内弯ぎみに立ちあがる口縁部に移行する。口端はヨコナデによって面をなす。体部内面はヘラ削り、外面はヨコナデ調整。小型丸底壺(2)は口径 9.4cmをはかり、体部径をわずかにうわまわる。外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整、口縁部内面はハケメを残す。図示しえない他の個体も、同様の器形・調整手法である。高杯(4~6)は器形全体を復原しうるものはない。杯部はわずかに内弯ぎみに外傾する。脚筒部は下半に若干のふくらみをもつ傾向がある。透孔はない。器面調整は一部にヘラミガキがあるものの、ヨコナデが多い。椀(3)は小形であるが、いわゆる手捏とは異なる。内外面とも粗いナデ調整。



埴輪実測図 (1/8)



土師器実測図 (1/3)

V埋葬施設

後円部中央の横穴式石室のほか、クビレ部から前方部墳丘上に3基の埴輪円筒棺と小石棺1基が検出された。小形の埋葬施設については、墳丘全面を調査したわけではないので、すべてを確認しえたものでない。

1号埋葬施設(横穴式石室)

後円部中央に位置し、前方部に開口する横穴式石室である(開口方向S40°W)。側壁上部が崩壊し、天井石が落下していたが、他はほとんど旧状をとどめている。

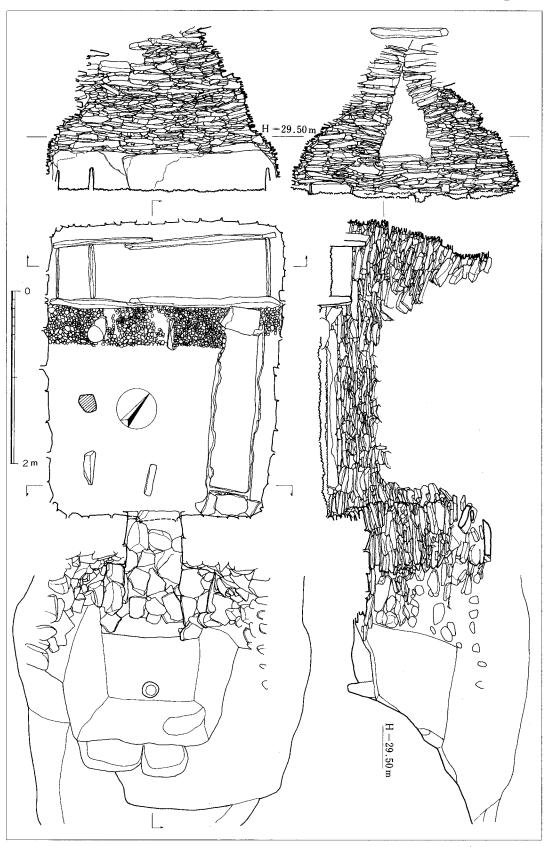
石室は、地山整形によって形成した頂部平坦面を掘削した掘り方のなかに構築されてい 掘り方 る。掘り方は幅8m、長さ8mの隅丸長方形のプランを呈し、深さ 2.2mの断面逆台形の 二段掘り込みである。その前方部側短辺中央に、一辺2mあまりの竪坑を穿つ。

石室の構造は、矩形の玄室と前壁中央に接続する小規模の羨道からなり、羨道入口部に 前庭と竪坑状墓道を付設する特異な形状をなす。石室周壁・天井石の石材は、積め石に使 用された小転石を除いて玄武岩である。周壁控えの裏込めは、玄武岩割石・転石に一部花 崗岩転石を混じえ、粘土を多量に使用している。なお壁面には赤色顔料を塗布する。

まず玄室は、奥幅 2.7m、前幅 2.5m、長さ 3.4mの矩形プランを呈し、推定天井高約玄室 2 mをはかる。割石小口積の周壁は、前・後壁がほぼ垂直に近く積みあげているのにたいして、左右側壁のばあい、床面より50cmほど上位から強く持ち送って積みあげ、天井部ではその幅40~50cmに狭まったと想定される。その強度の持ち送りが、結果として壁体上部の崩落を招いたとみられるが、そのきざしは壁体構築時にすでに現われていたのであろうか、左側壁のほぼ中央部に柱状の支石をたてかけている。なお注意すべき構造として、周突起 壁より内方に突出させた突起がみとめられる。奥壁に5個、左右側壁に各3個が現存するが、その配置からすると、本来は奥壁7個、左右側壁各4個の計15個が設けられていたと思われる。

石室と掘り方 (南から)





石室実測図 (1/40)



玄室 (東から)

> つぎに玄室にたいして小規模な羨道部は、前壁中央の、玄室床面より約50cmばかり高い 羨道 壁体中に接続する。幅 0.5m、長さ 0.7m、天井石までの高さ 1.4m、側壁は下部から斜 め上方に直線的に持ち送り、天井部では10cmほどに幅を狭める。玄室側から合掌形に見え るのは、左側壁上部が内側に倒れ込んでいるためである。

 羨道側壁は、入口部端から左右に0.6mづつ延長し、いま一度屈折して外傾する面をなす。 周壁をみると、羨道正面壁が割石小口積を多用して整然とした構成であるのたいして、左 右の側壁状石組は、硬くしまった青灰色粘土中に花崗岩転石が置かれた状態にちかい。左 右側壁は、石室掘り方の下段面と羨道正面壁との空隙を充填する控えの裏込めの加飾面と いえよう。この三方の壁面に囲まれた幅2m、長さ1mあまりの空間を、仮に前庭と呼ぶ ことにしよう。

前庭にとり付く墓道は、石室掘り方の前面中央を急角度に掘削した竪坑状をなす。掘り墓道 込みは下段掘り方から連続し、上位面は上段掘り方埋土、頂部平坦面盛土を行う過程で整形したものである。頂部平坦面からの深さは約2mある。床面は、掘削底面上に20~30cmのマサ土を充填し前庭床面に揃える。なお床面中央端に径20cm、深さ40cmほどのピットがある。柱痕跡を見いだすことはできなかったが、柱状物体の樹立に関連すると思われる。

後述するように、石室内には3体の遺体埋葬が想定される。その埋葬が同時でなく、順次追葬されたことは入口部閉塞にともなう種々の造作から知られる。石室実測図は、構築追葬と時の、換言すれば初葬時の入口部分をしめす。初葬時の閉塞は、羨道入口部を板石で覆ったとしても、前庭・墓道全体を埋め戻したか否か明かでない。第2回の埋葬時には、羨道・前庭床面を割石と粘土、墓道床面を粘質土で充填し、全体に30cmあまりの床上げを行う。この時の閉塞は、入口部を板石で閉いだのち、割石と粘土で板石前面を充填し、墓道全体を埋め戻している。第3回の埋葬(最終葬)のばあい、2回目の裏込めを斜め上方から掘削して板石まで掘り進んでいる。埋葬後は再び板石を立てて閉塞し、丁寧な割石の裏込めを行って埋め戻している。





前壁 (北から) (第1次面)





墓道と羨道 (第1次面)

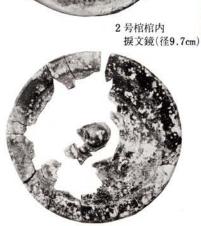


1 号棺副室 四猷鏡(径11.8cm)

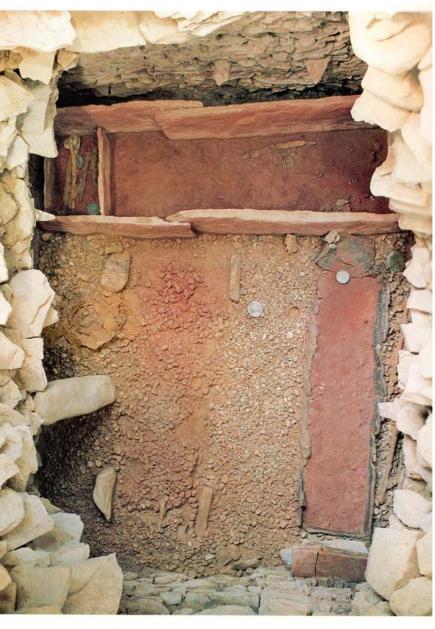


1 号棺副室 珠文鏡(径9.3cm)



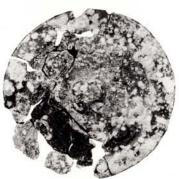


2 号棺棺外 舶載内行花文鏡(径14.8cm)





3 号棺棺外 四猷鏡(径11.5cm)



羨道床面 舶載位至三公鏡(径11.8cm)

棺の配置と出土遺物

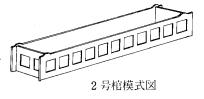
玄室床面(礫床)にそれぞれ素材を異にする3基の埋葬棺が検出された。奥壁に沿って 副室を付設した箱形石棺(1号棺)その前面羨道部寄りの右側壁に沿って埔質の棺(2号 棺)、2号棺とのあいだに通路状空間をあけて玄室中央左寄りに箱形木棺を配置する。その 手法は、肥後型石室にみる「コ」字形屍床配置に類似する。1 号棺は玄室幅いっぱいの長 「コ」字形配置 さから、また2号棺は素材の脆弱性、羨道規模、前壁側小口部にみられる種々の造作から みて、石室構築時に配置されたと思われる。3号棺は木棺埋置のために礫床を一段掘り下 げた溝からその存在を知りえたにすぎないが、両小口の四隅に置かれた人頭大の転石が礫 床下に深く埋め込まれており、棺の位置は石室構築時にすでに設定されていたとみられる。

ところで棺蓋は、3号棺のばあい明らかでないが、1・2号棺では棺身に等しい素材の ものは検出されていない。無蓋かそれとも有機質の素材を使用したかのいずれかである。

棺床は、3 棺とも礫床のままである。1 号棺のばあい、石室床面よりも棺内は20cmあま 棺と頭位 り高い。その上に2~3cmの厚さにベンガラを敷く。頭位は東向きであり、頭部の右側に 若干の水銀朱らしき塊がみられた。2号棺の棺床も石室床面よりわずかに高く、その上に 1~2cmの赤色顔料を敷く。頭位は北に向き若干の水銀朱がおかれる。3号棺では、床面 は石室床に等しいかやや低い。赤色顔料は北向きの頭部周辺は厚いが、他はうすい。

各棺の詳細は本報告にゆずるとして、素材・形態ともに特異な2号棺について触れてお きたい。2号棺の形態は、長側板の内側に小口板を挾みこんだ箱形木棺を忠実に模したも 埴棺の構造 のと思われる。底板はなく、いわば外枠のみであるが、長側・小口板一体造りである。胎 土は墳丘を囲繞する埴輪と等しく、陶棺と呼ぶと後期の亀甲形陶棺を連想するため、埴(質)棺としたわけである。器壁が2~3cmと厚いため、焼成が充分にゆきとどいておらず

全体に黒色をおびる。器表は赤色顔料が塗布される。棺の大きさは 内法では長さ 165cm、幅38cm、高さ30cmあまりである。なお長側板 が小口板を挟む部位の上面に山形の突起が貼付される。また外面に は、器表を一段低くして表形した方形文を格子状に配列する装飾が 加えられている。小口板には2個の配列がみられたが、長側板のば あい、その数は明かでない(模式図に表現した長側板の方形文様数は推測)。



遺物は石室上部、天井石の落下によって損傷を受けたものが多いが、ほとんど原位置を 保つと考えられる。したがって、遺物の出土位置から、1~3号棺のいずれに伴う副葬品 かを撰択することが可能である。その結果は下表にしめすとおりだが、二・三について確 定しえないものがあり、今後の検討にゆだねたい。

出土遺物一覧

		棺	内	剣1、銅釧2、櫛1、勾王、管王、ガラス玉、滑石製臼玉
	1 号棺	副	室	四獣鏡、珠文鏡、直刀2、剣1、鉾1、蕨手刀子2、針3、刀子、鉇、その他
		突起	上	素環頭大刀
2	2 号棺	棺	内	捩文鏡
	2万倍	棺	外	素環頭大刀、直刀、鉇、鉄斧、刀子
3 =	3 号棺	棺	内	直刀、刀子、鉾
	3 万相	棺	外	四獸鏡、長方板革綴短甲、鉄斧、鎌
	羨道部			位至三公鏡 (双頭龍文鏡)









2号埋葬施設(埴輪棺)

前方部の後円部寄り墳頂面にある。墳丘中軸線より東に寄り、長軸を中軸線から斜めにとる。長辺 1.4 m、短辺 0.9 m の不整長方形の土壙に、口縁部・基部を打ち欠いた鰭付朝顔形埴輪と、やはり両端を打ち欠いた円筒埴輪を組み合せて埋置する。棺としての大きさは、長さ1.2 m、幅 0.4 m である。両小口は円筒を半截した破片で塞ぎ、さらに棺側面を打ち欠いた鰭などで充填している。棺本体の上面に別個体の鰭付埴輪を半截した破片で覆っている。副葬品はみとめられなかった。

3号埋葬施設(埴輪棺)

東クビレ部の墳丘裾に接して設けられている。棺の長軸は墳丘中軸線にほぼ平行する。棺は、長辺 1.2m、短辺 0.5mの浅い隅丸長方形の土壙に、円筒埴輪を転用して水平に埋置している。棺の小口、側面には、花崗岩転石、玄武岩割石を置き、棺の安定をはかる。なお、円筒埴輪の口縁部は北を向くが、両小口は他の埴輪片で充填している。棺に転用した埴輪はほぼ復原され、全体を知ることができる(N章参照)。棺内からの副葬品等は検出されていない。

4号埋葬施設(埴輪棺)

東クビレ部から10mほどの前方部 I 段テラスに位置する。円筒埴輪と II 段葺石とのあいだに、長軸を葺石と平行して設ける。その際 II 段葺石基部の一部を除去している。土壙はほとんどみとめられない。棺は口縁部、基部を打ち欠いた朝顔形埴輪を使用している。現状で長さ90cm、幅40cmあまりをはかり、口縁部は北に向く。北側小口は明かでないが、南側小口は埴輪片で塞ぎ、さらにその周囲に花崗岩転石を配置している。副葬品は検出されていない。

5 号埋葬施設(小石棺)

前方部墳項面にあり、2号埋葬施設のわずか2mほど南に位置する。墳丘中軸よりわずかに東に寄り、石棺長軸を合せている。土壙は長さ1.5m、幅1m、深さ0.2mの不整楕円形で、靱形埴輪の基部と想定される楕円形埴輪の掘方を切断している。棺は人頭大の花崗岩転石を使用し、一部に2段目が残存する。棺内の平面形は楕円形で、小口壁をもたない。長さ1.4m、幅0.8m、深さ0.3mをはかる。棺内からの副葬品は未検出である。

VI おわりに

鋤崎古墳は丘陵尾根端に築造された全長62mの前方後円墳である。調査の概要は既述したとおりであるが、知見のいくつかを要約し、今後の検討作業に備えることにしたい。

墳丘 前方・後円部ともに三段築成である。後円部墳頂にわずかな盛土を行うほかは地山削り出しによって造形されている。各段斜面は人頭~拳大の葺石をめぐらせる。墳丘プランは、後円部径に比してクビレ部が細く、かつ先端部がさほど開かない前期的様相をしめす。後円部墳頂は径12mあまりの平坦面をなし、周囲に円筒埴輪列がめぐり、その内側は拳大の転石を敷きつめている。円筒埴輪列は墳丘裾、Ⅰ・Ⅱ段テラス、墳頂面端の4段にめぐり、朝顔形埴輪の配置もみられる。埴輪は川西編年(川西宏行「円筒埴輪総論」『考古学雑誌64巻2号、1978)のⅡ期に属する。円筒・朝顔形埴輪のなかには鰭付もある。これまで岡山県金蔵山が分布の西端であり、九州では初出である。鰭付朝顔形埴輪のなかに、最上段凸帯間の幅が他の凸帯間よりも著く狭いものがある。奈良県東大寺山、マエ塚古墳などに類例が知られる。また円筒埴輪では口縁部が5~6cmと短く、かつ強く外傾するものがあり、金蔵山、大阪府御旅山、人石塚古墳などに共通する手法がみられる。なお形象埴輪には家・盾・靱形がある。今後の検討を俟たねばならないとしても、形象埴輪を含む埴輪祭式を採用した古墳としては、九州でもっとも遡る可能性がつよい。

埴輪の編年 的位置

埋葬施設 埴輪棺・小石棺を含めて5 基の埋葬施設が検出された。とくに、後円部に築 造された横穴式石室は形成期構造をしめす例として注目される。石室は地山を掘削した8 ×8mという大形土壙中に構築されている。玄武岩割石を小口積みに積みあげ、左右側壁 を著く持ち送る。前方部側の壁面に狭小な羨道部を連接し、その前面に竪坑状の墓道を付 設する。石室に入るには、まず墓道に下り羨道を通過してさらに一段低い玄室に降る。こ うした入口部の構造は、北部九州初期横穴式石室に共通する手法であるが、留意すべきは 狭小とはいえ羨道部を備えたことにある。同様な石室例は佐賀県横田下古墳をあげうるに とどまるが、羨道が短く玄門状の構造に変化したものとして熊本県城二号、長崎県黄金山 古墳などがある。5世紀の第2四半期には、割石小口積みにかわって大形の板石を立てて 袖部を構成する手法が出現する。福岡県釜塚、狐塚古墳などがその初期の例である。たし かに、初期横穴式石室はそれぞれ強い個性をしめしアトランダムな形成を予想せしめるが それは定型化前の模索段階における多様性といい換えられる様相であり、総体としては石 室構造の系譜と推移を辿ることが可能である。詳細は別稿(柳沢一男「竪穴系横口式石室 再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1981)に譲るが、鋤崎古墳石室は叙上の石室 、のなかではもっとも遡る構造であり、鋤崎→横田下→城二号・黄金山・(丸隈山)→釡塚 ・狐塚という推移が想定される。では、いま最古の横穴式石室として5世紀初頭を下らな いとされている老司古墳3号石室との関係はどうであろうか。詳細については報告書の刊 行を俟たねばならないが、老司3号石室は横穴式石室の影響下に成立した形式とはいえ、 その構造を消化しえておらず従来の竪穴式石室構築技法のなかで解釈し、相当なデフォル メを加えた特異な形態と私慮する。したがって鋤崎古墳石室は、老司3号石室の延長上に あるとしても単なる技術的発展では理解しえないヒアタスが存する。この間に羨道部連接 という新たな技術導入が想定される。その祖形の追求は今後の課題であるが、漢城期百済 の基壇積石塚との関係も考慮されてよいであろう。北部九州における横穴式石室の受容は 4世紀代に遡る可能性が強いのである。

初期横穴式 石室の変遷

老司古墳と の関係

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集

鋤崎古墳

1981~83年調査概報 1984年3月31日

発 行 福 岡 市 教 育 委 員 会 (福岡市中央区天神1-7-23)

印 刷 秀巧社印刷株式会社